

編集後記

桜の季節、新学期の季節である春4月には教育・研究に関係のあるテーマをとりあげることが多いが、今年は第3回のシンポジウムとして「研究法を考える」を企画した。これまでのシンポジウムよりも更に広い範囲の人々に参加して戴きたいと考えた結果、「100人へのアンケート」が実現した。アンケート集計の数字も興味深い、自由記載の感想も皆さんよく書いて下さり、熟読玩味に価する。大川嗣雄先生の「研究の方法論は優れた研究を多く読んだり聞いたりすることで身につくもので、方法論そのものを取りあげるのは時間のムダ」との手厳しい御指摘を含め、研究の根源に触れる御意見が豊富に寄せられており、「読者参加」を願って企画した者の1人として喜ばしいことである。3つの論文(上田、嶋田氏、佐藤氏)、100人のアンケート(寺山氏の解説を含め)に続く総合討論は嶋田・佐藤両氏および本誌編集委員全員が参加し、ここでもできる限り多くの人の知恵を集めて考えるように心掛けた。困難な諸条件の中で研究心を育て、可能なところから手をつけるためのヒントや手懸りをこのシンポジウムの中から汲み取って戴けることを願っている。

本号ではシンポジウムにスペースを廻し

たため研究論文が掲載できないのは残念であったが、講座「歩行」では、有働氏の「歩行の神経機構」、「リハビリテーションと力動精神医学」では中村氏の「力動精神医学の実際」、とそれぞれ興味深い内容のものを書いて戴いた。

野々垣氏の「とびら」は本誌の20年とPT・OTの20年とを振り返って概観をして下さった。グラフまで作って下さったが、このグラフを眺めると色々の感慨が浮んでくるのは筆者ばかりではないであろう。

最後に私的なことで恐縮だが、筆者は2月、第5回国際リハビリテーション医学会(IRMA V)に出席のためマニラに赴き、政変(マルコス退陣、アキノ大統領政権確立)前夜のフィリピンの熱気を身をもって味わった。まだ予断を許さない情勢の頃であったが、黄色のTシャツで「ラバン(闘争)」のしるしのL字の指をさし上げた大デモは明るく陽気で、南国の革命というものに親近感を感じさせられた。今後の経済建設の前途は厳しいであろうが、不安と同時に希望もまた大きいと言ってよいであろう。

(上田 敏)

理学療法と作業療法 (第20巻 第4号)

1986年4月15日発行(毎月1回15日発行)

1部定価 1,250 円(配送料60円)
(年ぎめ予約購読料 15,350円)
(ただし、特別増大号を含む)
(送料弊社負担)

発行 株式会社 医学書院
代表者 椿 孝雄

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 受付台 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5703

(担当: 西塚・細田)

販売部直通 (03) 817-5659・5660

広告室直通 (03) 817-5696

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 (株)学術図書印刷 電話(03)814-4961

広告申込所 (株)医薬広告 電話(03)814-1971

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo © 1986,

Printed in Japan

本誌の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
東京都衛生局顧問

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
国立身体障害者リハビリセンター病院長

(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
ペインリハビリテーションクリニック高島平
整形外科

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
東京都立医療技術短大

富 岡 詔 子
信州大学医療技術短大

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

池 松 洋 子

伊 東 元 子

岩 崎 テル子

宇都宮 初 夫

金 子 誠 喜

鎌 倉 矩 子

木 村 信 子

菊 地 延 子

小 嶋 裕 子

斎 藤 みち子

鈴 木 明 子

高 橋 正 明

田 口 順 子

橋 元 隆 子

古 川 宏 子

松 沢 博 子

宮 崎 和 子

宮 前 珠 子

山 田 貞 雄

矢 谷 令 子